

入 試 年度	2026 年度	入試時期	I 期入学試験	実施日	2025 年 9 月 17 日
課程	博士前期課程	研究科	文学研究科	専攻・ コース	臨床人間学専攻臨 床心理学専修
入 試 方式	一般入学試験		試験科目	英 語	
「解答」または「解答例」及び「出題の意図」					
M 臨 2 8－1 （1）					
〔設問 1〕【解答例（採点時の観点）】					
近年、虐待やトラウマ体験を経験した子どもたちに対する、エビデンスに基づく治療法と有望な治療法の両方が急速に普及している。虐待やトラウマにさらされた子どもに対する有望な治療方法としては、トラウマ焦点化認知行動療法（TF-CBT）、家族のための代替療法（AF-CBT）、親子相互交流療法（PCIT）がある。トラウマ焦点化認知行動療法（TF-CBT）は、3～18 歳の子どもと養育者を対象とし、並行および共同セッションで実施される。認知処理、情動調節、暴露、トラウマ体験の共有、安全のための計画などを含み、初期から養育スキルも扱う。複数の無作為化比較試験で心的外傷後ストレスの軽減と養育者の支援能力の向上が確認されている。家族のための代替療法（AF-CBT）は、身体的・心理的虐待歴のある 5～17 歳の子どもと養育者を対象とし、個別および共同面接で実施される。心理教育、認知処理、情動調節、対人スキル指導や暴露療法を含み、親には非暴力的な行動をトレーニングする。虐待再発率の低下と外在化行動の改善が示されている。親子相互交流療法（PCIT）は、2～7 歳の子どもと養育者を対象とし、直接指導を特徴とする介入である。養育者報告による子どもの行動改善、養育ストレスの軽減、抑うつ減少、学校環境への一般化などが確認されている。虐待・ネグレクト歴のある家庭でも再発率が低下することが示されている。これらの治療方法の特徴はエビデンスに基づいており、無作為化比較試験によって有効性が検証されている点にある。また共通する特徴として、親（養育者）の積極的関与を重視していること、親トレーニングを含むこと、子どもと親の双方を対象とした介入であることが挙げられる。」					
（採点時の観点）					
基本的な英語力の読解能力を測ると共に、児童虐待やトラウマに対するエビデンスに基づく心理療法と近年の動向に関する基礎的な知識を問う。					
(1) TF-CBT と AF-CBT と PCIT の説明があること					
(2) エビデンスに基づくということ					
(3) 親の関与と訓練があること					
(4) 親と養育者を含んでいること					

〔設問 2〕【解答例（採点時の観点）】

基本的な英語力の読解能力を測ると共に、支援機関におけるニーズとエビデンスに基づく支援の重要性の理解を問う。

- (1) 4～12 歳の子どもとその親/養育者（身体的虐待/ネグレクトの既往歴を有する）を対象とした PCIT のランダム化比較試験では、治療後 2 年後の子どもの身体的虐待の再発率が検討され、PCIT のみを実施した群では、再発率が 20%未満であり、これは標準値よりも有意に低い結果であった（Chaffin et al., 2004）。
- (2) Pearl らは、PCIT を受けた子どもにおいてトラウマ症状の軽減を報告している（Pearl et al., 2012）。

【出題の意図】

上記のとおり〔設問 1〕では、基本的な英語力の読解能力を測ると共に、児童虐待やトラウマに対するエビデンスに基づく心理療法と近年の動向に関する基礎的な知識を問うている。また〔設問 2〕では、基本的な英語力の読解能力を測ると共に、支援機関におけるニーズとエビデンスに基づく支援の重要性の理解を問うている。

M 臨 28-1 【Ⅱ】

【解答例（採点時の観点）】

下記の点について記載できているか、記載の正確さによって採点を行う。

- ・プレイセラピーにおける身体接触はどのようなものであっても、促されるものではない。
- ・子どもが身体接触を求めた場合はその思いを受け止め、別の形で表現できるようにセラピストは務める。
- ・もし、身体接触が起きた場合には、言葉で別の形で表現できるよう促すことが望ましい。
- ・身体接触から何が理解されたかを養育者へ伝えることが重要である。
- ・このように気持ちを受け止めて制限をすることは治療的な意義がある。

【出題の意図】

・プレイセラピーに関する基本的な原則を説明した文章である。心理学に関する内容が記述されている文章を読むための基礎的な英語力を有しているか、及び、自身が有しているプレイセラピーに関する知識とつなげて正しく意図を理解できる学力があるかについて確認する内容である。

M 臨 28-3【Ⅲ】

【解答例】

クライアントの現在の問題や、その人がアセスメントを求める理由がどんなに良性であったとしても、アセスメント過程で差し迫った危機や生命を脅かす行動の危険性が見えてきたり、あるいは、法的に第三者に報告しなければならない情報が明らかになったりする可能性が常にある。

アセスメント過程で得られた情報で、臨床家が直ちにフィードバックを提供しうるものは、さまざまな種類があるが、おそらくそのもっとも一般的なものは、自己または他者に対する深刻な暴力の危険性、児童虐待、高齢者虐待、または類似の虐待の証拠、あるいは、いままさに差し迫った、急性の心理的不全などであろう。アセスメントの専門家は、このような可能性に備えて計画を立て、法的および専門的な責任（例：児童虐待報告法）を熟知し、相談のための適切なリソースを維持し、緊急時に紹介セラピストやその他の関係者と連絡を取る方法を知っていなければならない。たとえば、アセスメントの専門家が、アセスメントの経過でクライアントが自殺する危険性が高いことを発見した場合は、クライアントが命を絶つ可能性を最小限にするために、照会してきたセラピストに直ちにフィードバックするなど、適切な措置をとらねばならない。

【出題の意図】

近年、心理臨床場面では、心理検査のフィードバックへの関心が高まり、この仕事の重要度が増している。本問で取り上げたのは、フィードバックを行う際の、専門家としての姿勢や留意点などについて論じた、影響力の非常に大きい論文である。したがって、この論文をどの程度正確に読み取る力があるかを問うために、本問を出題した。

合否判定の方法及び基準

入学試験は文学研究科のアドミッションポリシーに基づき、これを満たす学生を募集することを目的に実施しています。

合否判定については、本研究科のアドミッションポリシーを満たすことを、総合的な視点により合否を判断しております。